

線香花火

夏のめぐり

① 福岡県みやま市

産声を上げた小さな火の玉が、いつとき激しく光の矢束を四方に散らし、やがてポトリと地に落ちる。「一見地味だけど、実は派手。火花がどんとん表情を変える」。福岡県みやま市のブドウ畑に囲ま

れた筒井時正玩具花火製造所の800度くらいまで上がった、安い中国産に押され、今ではほかに群馬、愛知両県にしかないという国産の線香花火の製造元。筒井良太さん(44)はその3代目になる。明るく、大きな火花。国産ならではの魅力を生み出す鍵は火薬の調台にある。原料は硝石(硝酸カリウム)、硫黄、松煙。松煙は切り倒して30年ほどたった松の根をいぶした宮崎県産を使う。調台割合は「湿度なんかの影響を受けるんで、いつも通用する正解はないんです」。試作品の火球がきれいな真ん丸になれば、最高温度が理想

という。火花の歴史は古く、江戸時代には徳川家康が観覧したと伝わる。戦の道具だった火薬は江戸の世で庶民の娯楽としての火花に形を変え、この頃、香炉に線香のように立てて遊んだのが線香花火の名の由来



線香花火を見つめる筒井良太さん

限られた時間で咲く 人生みたいに

長く隆盛を誇った国産花火は、1980年代から中国産に徐々に押され、都市部では遊べる場所も少なくなり、おもちゃ花火の国内生産額は過去約25年で5分の1に落ち込んだ。

線香花火も「単価が30分の1ほど」(大手卸業者)という中国産が今や9割以上を占める。筒井さんは、90年代末に「国産最後の1社」とされたおじが経営する福岡県八女市の製造所が廃業した折に技術と道具を引き継いだ。「300年以上日本人に愛されてきたものだから。それまで扱ってこなかった線香花火を看板商品に据えた」。

8年ほど前に開発した「線香花火筒井時正」は、八女の手すき和紙を草木染で染め、持ち手を花びらのように仕上げた繊細な一品。「人の一生に例えられる花火だからこ

★筒井時正玩具花火製造所 1929年創業。子ども向けのおもちゃ花火約30種を手掛ける。線香花火は年間約80万本を製造。長手、スポ手ともに15本入り540円。「線香花火筒井時正」40本に、九州産ハゼの実から抽出されたろうでできた和ろうそくと、九州の山桜でつくったろうそく立てが付いた「花々」はきり箱入りで1万8000円。製造所のほか、ホームページ＝<http://tsutsuitokimasa.jp/>での購入も可能。福岡県みやま市高田町竹飯1950の1。電話＝0944(67)0764。

そ、人生の節目に贈ってもらえれば」。きり箱に納め、大人向けの贈答品として新たな市場を開拓する。

夜。ひとしきり派手な火花で騒いだら、最後によりやくそれを手に取る。じー、パチパチ…ポトン。線香花火の一生は、祭りの帰り道のような、どこか切ない夏の日の記憶につながっている。「限られた時間で天命をまっとうするようにならね」。生きざまみたいなものを示してくれてるんじゃないですかね。だから人は魅せられる。(音藤幸奈)

和ろうそくと、ろっそくを立てが付いた「花々」



日本の夏を感じさせる各地の品々と作り手の思いを、西日本新聞と友好紙の北海道新聞、東京新聞、中日新聞の記者が紹介します。